

とは上記の他に、別の原因もあるものと推測される。因みに両試験池とも淡水と陸土による濁りの影響は最も強く受けるところにあり、これらの影響が考えられる。いずれの移植法においても定着率は4~8%で良くないが、あえて両者を比較すれば芝植えが株植えより良いようである。しかしいずれにしてもその生長は遅く、1m間隔の芝植えで、移植場所の海底が一面におおわれるようになるまでには少なくとも2ヶ年を要する。

3) 施肥試験

目的 アジモの根茎の生長について、これまでにみてきた刈り取り後の復元所要期間や、堀削池への移植経過等からその速さはあまり速くないことがわかってきた(昭和48・49年度報告)。そこで環境要因として制限されていると思われるものの中で肥料分の欠如を取り上げ、天然アジモ場における施肥効果をみるため、下記の方法により施肥試験を行なった。試験地は恩納村屋嘉田鴻原のアジモ場であり、底質は礫を含む砂質帯である。

方法 肥料は鶏糞及びIB*を用い、施肥方法は数十ヶ所にピンホールをあけたビニール袋へ鶏糞1kg(N=25g)、IB80g(N=25g)を別々に封入し、天然モ場の深さ約15cmに1袋/m²づつ施肥した(鶏糞区5点、IB区5点)。施肥後4ヶ月目の昭和50年10月に坪刈りを行ない生育量等を調べた。

結果 当アジモ場の優占種であるリュウキュウスガモとベニアマモについて生育湿重量、葉体長、株数等を測定し、その結果を第3表に示した。この表からリュウキュウスガモとベニアマモの生育量に

ついて、無施用区との対比からその増減の様子をみると、前者が鶏糞で1.11、IBで1.22倍、後者が鶏糞で1.41、IBで1.33倍の増があった。その増分の要因を平均葉体長、単位面積当りの株数、及び1株当りの草体重量に分けた場合、両種とも鶏糞とIBそ

第3表 施肥後の坪刈りの結果

		鶏糞区	IB窒素区	無施用区
リュウキュウスガモ	1 m ² 当りの生育量(湿重g)	2,280 (1.11)	2,520 (1.22)	2,060
	平均葉体長±s(mm)	93.1±15.8 (1.05)	80.3±12.9 (0.91)	88.4±14.5
	1 m ² 当りの株数	684 (1.37)	764 (1.53)	500
	1 株当りの草体湿重(g)	3.33 (0.81)	3.30 (0.80)	4.12
ベニアマモ	1 m ² 当りの生育量(湿重g)	1,000 (1.41)	940 (1.33)	708
	平均葉体長±s(mm)	123.8±28.2 (1.05)	119.0±24.3 (1.01)	117.6±35.3
	1 m ² 当りの株数	868 (1.40)	920 (1.48)	620
	1 株当りの草体湿重(g)	1.15 (1.01)	1.02 (0.90)	1.14

() 内は無施用区に対する比率

* 緩効性窒素肥料(三菱化成)

